

能登半島地震支援活動にDMAT出動

かけはし

特別号

2024.01

[発行]



発生時から迅速な対応

令和6年1月1日、能登半島を震源地とする最大震度7の地震が発生しました。震災発生後、当院の災害派遣医療チーム（DMAT）メンバーはすぐに登院し、情報収集を行いつつ、2次派遣の可能性を考慮して、必要な準備に取り掛かりました。

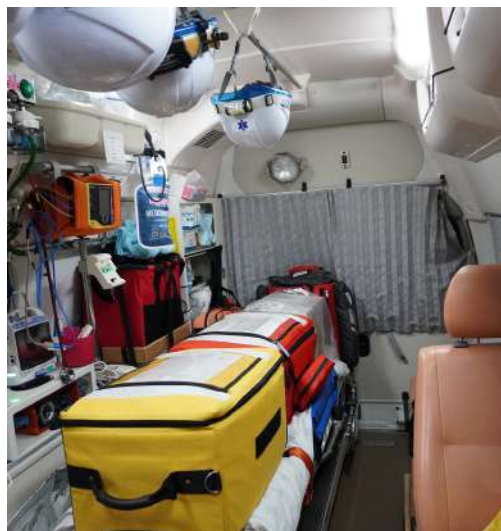


写真：左から今安弘樹救急救命士、勝又広太看護師、弥永彩有診療放射線技師、西川里穂医師、奥村能城医師

出動・現地支援開始

3日に具体的な要請が入り、翌4日の朝6時40分に当院DMATメンバーの中から奥村能城医師、西川里穂医師、勝又広太看護師、弥永彩有診療放射線技師、今安弘樹救急救命士の5名が現地向け出発しました。

今回のDMATのミッションは主に4つあり、①病院支援を指揮する「本部運営」、②診療行為などの「病院支援」、③人や物資が限られ、断水状態が続く病院から120名いる入院患者さんの内、約半数を別病院に搬送する「搬送支援」、④地域を守る活動として避難所の状況を把握する「避難所調査」に関わる活動を行うことになっていました。



写真：準備した資機材をドクターカーへ

当院DMATはまず公立能登総合病院に到着し、次に穴水総合病院から物資を調達後、能登町役場、珠洲市役所へ物資の受け渡しを行い、活動拠点となる珠洲市総合病院へ移動しました。道路状態が悪く、同病院に到着したのは出発から12時間後でした。

到着後、早速のアクシデントが発生。4日時点では同病院には当院を含め11チームのDMATがいましたが、道路状態の問題により現地活動の時間に制約が出てしまったため、翌日にはほとんどのチームが引き上げられることが判明しました。このままではいけないと、奥村医師は当院のDMAT活動期間の延長と後続がなるべく途切れず派遣されるよう能登のDMAT活動拠点本部へ要請し、他のDMATが引き上げた後、自らが本部運営のリーダーを引き継ぎ活動指揮にあたりました。



写真：通行が困難な道路状態



写真：活動を指揮する奥村医師

足りない人手や物資 できることを最大限に

西川医師は被災から家に帰れていない現地の医療スタッフに代わりに救急診療を行い、搬送のためのヘリポート管理のリーダーも担いました。勝又看護師は診療支援に加え、病棟に看護師が常時配置できるシフトを組み、人員派遣を行いました。今安救急救命士はロジスティクスリーダーとして支援指揮所の運営と弥永診療放射線技師と共に病院内で足りない物品の把握や必要な情報発信に従事しました。

約124時間後に救出 希望の光を救いたい

6日夜には地震発生から約124時間後に救出された患者さんの救命にあたりました。救出時に適切な処置がされていなければその場で命を落としていてもおかしくない極めて危険な状態でしたが、被災地の希望の光として何としてもこの人には生き残ってもらいたいという強い思いでリーダーであった奥村医師の指揮のもと、複数のDMATが一丸となり治療にあたり、患者さんは一命をとりとめました。



写真：救出された患者さんの状態を確認する西川医師と勝又看護師



写真：救命した患者さんの搬送を見送る西川医師



写真：必要な情報発信を行う今安救急救命士と弥永診療放射線技師

できる限りの支援活動 全ての人に感謝

奥村医師は支援活動を振り返り「震災発生時から自宅に一切帰宅せず陣頭指揮をとっておられた先生にも帰宅してもらえないようになり、私たちの支援が少しでもお力になれたのではないかと感じています。また入院患者さんの搬送に関しても、現状を理解し協力いただいた患者さんや断腸の思いで大切な患者さんを別の病院に搬送する決断をしてくださった担当の先生方の協力があってこそ出来たことだと思っており、とても感謝しています。非常に過酷な現場でしたが、その環境にずっと置かれている被災者、そして自身も被災者であるにも関わらず医療提

供体制を維持しようと頑張る医療スタッフのために、持っている力でできる限りのことをできなかったのではないかと思います。予定外に長く過酷なミッションになりましたが、それぞれの力を尽くしてくれたメンバーには感謝してもきれません。また当院で後方支援をしてくださった職員の皆さんにも感謝したいです」と支援活動に携わったすべての人に感謝の気持ちを述べました。

当院DMATは1月4日～8日までの4日間の支援を終え、無事帰院しました。



写真：帰院したDMATメンバーを出迎える当院職員

編集後記

この度被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。皆さまの安全と被災地の一日も早い復旧を心より祈念致します。当院では引き続き、DMAT派遣による支援活動を行っています。【済生会滋賀県病院】